

## 巻頭言

大都市の温暖化が進んでいる。朝東京を出て静岡へ、昼に静岡から東京へとんぼ返りをした。県庁から歩いて静岡駅へ、爽やかで快適であった。東京駅に着いて熱さと高い湿度でむっとして極めて不快であった。これが俗に言うヒートアイランド現象だと改めて実感した。

東京では汐留や品川の新都心の再開発が進められたが、都市の温暖化現象を緩和する策は殆ど考慮されることなく開発されたようである。この開発が海からの涼しい風をさえぎり、ヒートアイランド現象を助長し、都心環境へ悪影響を与えた可能性は否定できない。また、開発区内のヒートアイランド現象を和らげるような「やすらぎのあるまちづくり」の工夫にも欠けている。

人々がやすらぎを感じられるまちとはどんなものであろうか。やはり「水と緑」の空間が十分に確保されていることであろう。都心のビル街に清らかなせせらぎがあり、そのせせらぎに沿って、夏の強い日差しをさえぎる緑の空間（植樹）が広がるようなまちづくりができないものかと、いつも夏になると感じている。

そして、都心の温暖化の大きな原因である人工排熱の増大を抑えるまちづくりとはどんなものであろうか。まさに、省エネルギーのまちづくりである。開発区内に建てる個別ビルの省エネルギーのための最適化に目を奪われることから、まち全体の省エネルギーの最適化がおろそかになってはいないだろうか。部分最適化（Partial Optimization）の積上げが全体最適化（Total Optimization）にはならないことを、都市開発行政を担う人たちがもっと理解すべきであろう。

ヒートアイランド対策大綱に盛られた対策の推進事項には、人工排熱の低減、地表面被覆の改善、都市形態の改善、ライフスタイルの改善の四つがある。これからの都市再開発においては、この四つ観点からだけではなく、周辺地域への影響緩和、周辺地域との連携・融合を考慮に入れた都市計画づくりが必要で、再開発の是非はこれら六つの観点から総合的に評価を行い、開発の是非を問うて行くべきではなかろうか。

先にあげた水と緑の空間確保は大綱の地表面被覆の改善と都市形態の改善に取り上げられている対策である。省エネルギーは人工排熱の低減の対策である。省エネルギーで注目すべきは「未利用エネルギー等ヒートアイランド対策に資する新エネルギーの利用促進」である。また、周辺地域への影響緩和では「風の道」の確保である。周辺地域との連携・融合の視点では、開発地区近傍にある公共施設や公共空間の積極的な活用が都市開発政策において重要な課題である。

水と緑の空間確保において、公共施設や公共空間の積極的活用で主役を演じる可能性が大きいと思われるものに都心近傍にある下水処理施設（水再生センター）がある。この下水処理施設のエネルギー消費は大量であり、省エネ法の第一種エネルギー管理指定工場で合理的なエネルギー使用が義務づけられている。また、大量の再生水を持っている。

近くに下水処理場があるような地域に新たに再開発プロジェクトが計画されるような場合には、この下水処理場の施設や空間を徹底的に活用させてもらうスキームを検討すべきである。特に、都市の温暖化を緩和するための未利用エネルギーの再開発地区での有効活用方策や再生水の有効活用である。

再開発地区にこの再生水を還流して「せせらぎ」がある癒しの空間を演出することで、「爽やかで、にぎわいのあるまちづくり」ができないものかと思っている。また、未利用エネルギーの活用として、「せせらぎ」に流れる水温を適度にコントロールして、夏には涼しさを、冬には温かさを、春秋には爽やかさ感じさせる工夫ができないものかとも思っている。

代表取締役社長 黒川 俊夫